社会　　ある楽観論者の悲観論

世の中の人には、もの事を楽観的に考える人と、悲観的に考える二つのタイプがある。これは、その人の性格や価値観の違いによるのかも知れないが、よく耳にする言葉に「明日は明日の風が吹く」という言葉がある。その一方「どうせ頑張ってみてもどうにもならない」という表現も日常的に使われる。

確かに、明日という日はきっと来るし、人の努力だけではどうにもならないことがあることも認めよう。ところが、後者の「どうせ・・・」という副詞には投げやり的な諦めの気持ちが含まれているように感じられて仕方がない。

人が生きるということは、古歌にあるように、「越えなんと思いし山に来て見れば我が行く先は山のまた山」で、けっして楽しいことばかりではなく、今日(こんにち)のように、千年に一度の大災害や百年に一度の世界的不況と云わる中にあっては、誰もが暗く沈みがちになる。こうなると人は、その起因する理由を追求したり、何かに原因を押し付けたくなる。巷で多く耳にするのは、「最悪の時代だ」という言葉である。

しかし、この「最悪」は何に対して、何時(いつ)の時代に比べてなのであろうか。わが国のどの時代を掘り下げても、現代ほど自由で開かれた時代はなかったはずである。「努力しても報われない時代」と嘆く人は自らを悲劇に引きずり込む悲観論者である。多くの大人たちが、口を揃えて、「現代は最悪で社会が悪い、政治が悪い、努力しても出口が見えない」などと云い続けていると、それを聞いている若者は、自分たちは不幸にも最悪の時代に生まれてしまったのだと錯覚し、固定観念まで出来上がってしまう。つまり、「どうせ・・・」が先行して、勤勉や一所懸命が軽薄になってしまう恐れさえあるのである。

これからわが国の未来を背負って立つ若者の世界は、広く大きく希望のある世界でなくてはならない。だから、厳しい時にあっても、大人たちが、前向きに生きる姿を見せていかなければならないのだ。

「論語」の中に、孔子が顔回を評した文言(もんごん)が残っている。最も印象深い言葉は「不遷怒」の三文字である。孔子は三千人の弟子の中で、顔回を最も信頼していたと云われる。それは、彼の学問への熱心さもさることながら、辛く苦しい時でも顔回は「怒りを他人に遷(うつ)さなかった」からだと云われている。

愚痴や嘆きは何物も産むことはない。あらゆるものに楽観的になるのは、危険が伴うかも知れないが、必要以上に悲観的になるのは、もっと大きなものを失うかも知れないのである。次代を担う人々の夢や希望やヤル気の喪失である。

話は飛躍するかも知れないが、私の教え子の数人が医師になっている。皆五十歳を越え、勤務医も開業医もいるが、五十歳代は医師として油の乗り切った頼れる医師群である。豊かな経験を積み重ねて来ているからである。その医師たちが時折わが茅屋に遊びに来て雑談を交えて云うには、「私もようやく、初対面の患者さんを診て病気の軽重ではなく、治りが早いか遅いか直感で判断出来るようになりました」と云う。さらに加えて、「問診するとそれは確信となり、十中八、九は間違いないのです」とも云う。私は冗談のように「診断の前に病の治り方が判るのは神業だね。いや、神業は言い過ぎだとしても、今や押しも押されもしない名医だよ。そこまで到達したあなた方に敬意を表するよ」これは交ぜっ返しではなく私の驚きと共に本心を吐露したものであった。酒が入って饒舌になった彼らの云うことは、要約すると次のようになる。「患者が病気を深刻に考え過ぎ、自らが治らないと決め付けている人の病は直りが遅くなる。

反対に診断の結果、難しいと判断できる患者でも先生に一切お任せしますので、切るとも焼くともご自由に」と笑い声さえ上げる人の病は、学術書に例がないほど治癒が早いという。医師と患者の信頼がここまで来ると素晴らしい。我々が病院に行く時は不安と一緒に行くものである。そのとき医師の診断の第一声が肯定語から始まるか、否定語から始まるかでは天と地の差になる。このときの医師の言葉は神の声にもっとも近い言葉になるからである。昔からの俚諺に「病は気から」は現代でも生きているらしい。「天は自ら助ける者を助ける」も慰めの言葉だけではないらしい。だとするならば、医師ならずとも現代社会は気力の失いつつある人々に、元気の出る言葉を語りかけ続けなければならないだろう。引き籠りや欝気味の人に「がんばろう」とは云わない方がよいと云った著名な医師もいたが、「共にがんばろう」の言葉には妙薬の効がある。しかも、その効果はやがて、我が身の元気と自信になって返って来るに違いないのだ。

苦悶しながら医師や看護士に苦情を云いながら他界するよりも、笑みを浮かべながら「今日までありがとう。お陰さまで私は十分に生きました」と言って永遠の眠りについた人こそ、真に天命を生き

た人と言えるのではないかと思う。東日本大震災以降、いたるところに「がんばろう福島！」や「がんばろう東北！」「がんばろう日本！」の標語が見られる。しかし、標語は一時の気力を与えるかも知れないが、絶望の淵に立たされた人に生きる勇気や活力を持続的に与え続ける力とはならない。一方、第三者の心の籠もった言葉や行動の持続は復活そのものとなる。さらに大切なのは、人間の運命を決めるのは自分しか居ないのだということの自覚であろう。

今まで苦労した人は、他人の心の痛みが分かって他者に優しくなれると聞いて来た。でも、実際には同じく苦節を経験した人でも二者に分かれるという現実も見てきた。正直を核とした人格者と利己的な偽善者というもう一者である。人格者は体験を通して希望や夢を他者と共に笑顔で分かち合うことが出来るが、偽善者は自分だけが苦労をする必要はないと笑顔を見せながら他人を平気で騙すのである。

意味のある年齢を重ねてきたという強みは、初対面の人には軽々しく評価を出さないことにある。十五分も会話をしていれば、何となくその人の全人格は伝わってくるものである。時折り世間を騒がす、大金を騙し取られたというニュースの根っこには美味しい話に

飛びついた儲け話が多い。すべての人間に不審の目を向けて過ごすのは寂しいが、地味ではあっても正道をコツコツ歩いていくのが最上の人生の歩行なのかも知れない。この歩き方が自然体の中で当たり前のように出来るようになれば、その人は楽観論者いや、誰にも盗られる事のない本物の幸せを得た人と言えるかも知れない。